

遺品写真から検証する富本憲吉再考 1：留学時代

—1909（明治42）年の留学時代のアルバムを中心に—

森 谷 美 保

〈はじめに〉

近代陶芸界の巨匠富本憲吉（1886-1963）は、生前没後も含めた多くの展覧会により、その作品と業績は広く知られている。富本の50年以上に及ぶ多彩な創作活動の中でも、近年特に注目を集めるのは、東京美術学校図案科卒業後の陶芸家へと至る過程や、富本家のモダンな暮らしぶり、戦前に行った全国各地の地方窯での量産品制作など、明治末期から昭和戦前期にかけての動向といえる¹。本稿ではこうした活動の原点ともいえるべき、1908（明治41）年から1910（明治43）年に至る富本のイギリス留学時代に、焦点を当てるものである。

富本の留学時代に関しては、富本が晩年に記した「私の履歴書」²の中で回想されている。また、美校時代からの友人南薫造へ宛てた富本の書簡³や、イギリスで懇意になりその後親交を深めた白瀧幾之助への絵はがき⁴などもあり、当時の富本の行動の一部を知ることが出来る。上記の資料を整理した『近代の陶工・富本憲吉』や『富本憲吉研究会誌あざみ』にも留学時代のことが記されている⁵。

さらに、このたび筆者は、未公開であった留学時代のアルバムを含む、富本の遺品写真約1400枚を詳細に調べる機会を得た⁶。留学時代の写真は約200枚が現存し、それらは富本が作成した2冊のアルバムに収録されている。富本は留学に際しカメラを持参したので、アルバム写真の大半は彼自身が撮影したものと考えられる⁷。アルバムには富本と親しかった友人たちや、イギリスをはじめ各地を旅した時の風景写真などが貼られており、留学時代の富本の交流や足跡が検証出来る貴重な資料である。

そこで本稿では、富本のイギリス滞在の動向を時系列に整理して、本アルバムの未公開写真を紹介しながら、イギリス留学時代の軌跡を辿り、富本憲吉のイギリス留学の意義を考察する。

〈富本のイギリス留学時代〉

最初に、富本のイギリス滞在の概要を記してみたい。

イギリス留学時代の富本の動向については、『近代の陶工・富本憲吉』の末尾に掲載された「年譜」⁸をはじめ、これまでに開催された大規模な「富本憲吉展」図録の「年譜」⁹などで発表されているが、それらには詳細な月日までは記されていない。また、近年発表さ

れた新たな資料¹⁰もあるので、それらを精査して、判明した限りの月日とともに、留学時代の富本の行動を改めて整理してみた。なお、それぞれの事項は下記の(A)から(G)を参考にし、出典を末尾に明記した（＊は筆者の注）。

第一次資料（富本および関係者の書簡、日記など）

- (A) 『南薫造宛富本憲吉書簡（大和美術史料第三集）』¹¹
- (B) 『富本憲吉の絵手紙』¹²
- (C) 『南薫造日記・関連書簡の研究』¹³
- (D) 「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について 白瀧幾之助の南薫造書簡」¹⁴
- (E) 「資料紹介：南薫造『1909年日記』と『滞欧期ノート』」¹⁵

第二次資料（上記資料をもとにした書籍、資料）

- (F) 『1910年の富本憲吉』¹⁶
- (G) 『近代の陶工・富本憲吉』¹⁷

1908（明治41）年

12月19日、神戸港から平野丸によりイギリスへ向かう¹⁸。

1909（明治42）年

2月10日、午後3時、平野丸にてイギリスに到着（E）。

＊到着後、南や白瀧が下宿するオンスロースティユディオに滞在したと思われる。

2月23日以前、トテナムへ移る。（F）¹⁹

4月3日、白瀧幾之助とともに、南薫造が滞在するウィンザーへ向かう（E）。

4月9日、南薫造とともにウィンザーの町はずれへ行く（E）。

4月13日、南薫造、ロンドンへ帰る（E）。

＊富本も同様にロンドンへ戻ったと考えられる。

＊留学アルバムによると、4月から6月にかけて、パリへ旅した可能性がある。

6月初旬、ファンショウロードに引っ越す（F）²⁰。

6月から8月、ハンティンドン、イルフラコム、デヴォンシャーなどイギリス各地を旅行する（Gおよびアルバム）。

9月以前に、カスカートロード26へ転居した（A）。

10月5日～13日、ハンティンドンへ再び旅した（B）。

11月下旬、新家孝正工学博士の随員としてイタリア、ドイツ、エジプト、インドへ視察に行く話が持ち上がる（A）。

12月末、新家博士の随員としてロンドンを出発しインドへと向かう（F）。

1910（明治43）年

1月～3月、パリ、マルセイユ、エジプトのカイロをへて、インド到着（G）。

3月22日、インドを出発し、3月28日にロンドンへ戻る予定と記す（A）。

4月3日、ロンドン到着（D）。

4月29日、三嶋丸にて帰国（D）。

6月15日、神戸到着（A）。

以上が、富本の留学時代の動向である。

次に滞在中の富本の様子を簡単にまとめてみる。富本の留学は年度でみると、1908（明治41）年から1910（明治43）年に及ぶものだが、実際にロンドンで生活したのは1909（明治42）年2月から同年12月末までの1年弱の期間であった。留学の目的は「室内装飾を勉強する」ため、留学者の多いパリではなくロンドンを選んだのは、南薫造ら友人たちが先に留学していたのがその理由だと、「私の履歴書」のなかで述べている。富本はロンドン滞在中に、イギリス各地へと頻繁に旅をして、思いがけず随行員としてインドへ視察する機会も得るなど、充実した留学生生活を過ごした。インドからロンドンへ戻った後も、さらに数年イギリスに滞在するつもりでいたが、奈良の生家から帰国を促され、送金も絶たれてしまい、1910（明治43）年4月末には帰国のためイギリスを出発した。

ロンドン滞在時には毎日のようにヴィクトリア・アンド・アルバート美術館へ通っており、「これは工芸品の研究を第一の目的として建てた博物館で、私は最初から強く心ひかれるものがあり、毎日の日課として訪れた」²¹という。美術館では連日工芸品のスケッチを重ねて、それらの一部は帰国後に『美術新報』で発表された²²。

年譜を見る限り、富本はロンドンでの下宿先を何度も変えているが、「私の履歴書」に「下宿はサウスウエストのカスカードロード二十六番地、ミセス・シェファードさんという未亡人の家で中流の上といったところ」と記しているのが、最も印象に残ったのが「カスカートロード二十六番地」と考えられる。同地の地名はアルバムにも記されており、この下宿で写したと思われる写真も多く存在する。

そして1909（明治42）年12月末には、富本はインドへの視察旅行へ出掛ける。この旅行のいきさつについては、「私の履歴書」に詳しい。それによると、明治天皇の即位50年を記念して日本で博覧会を開く計画があり、工学博士の新家孝正氏が世界各地の建築物を研究するため、各国の視察旅行をしていた。アメリカを経てフランスへ到着した新家は、イスラム教建築調査のためインドへ渡るにあたり、「若くて英語を話せ、建築を知っていて写真をうつせるものはいないか」と、滞欧中の留学生のうち該当する若者を探したという。パリで新家からこの相談を持ち掛けられた、富本の美校時代の恩師大沢三之助は、すぐに富本を推薦した。採用された富本は、フランスやイタリア、エジプトなどを経由してインドへと渡ることになったのである。

この視察旅行に際しては、「ドイツ製の大きな当時最新式のレフレックス・カメラと、回教建築に関する参考書類を当時の金で十万円ほど買い込んだ」というので、富本は個人のカメラは持参しなかったのかもしれない。留学時代のアルバムにも、この視察旅行に関する写真は残されていなかった。

以上が、富本のイギリス留学時代の活動の概要である。では、実際のイギリスでの暮ら

し、当地での交流関係がどのようなものであったのであろうか。留学時代のアルバムを見ていながら、再びその足跡をたどってみたい。

〈留学時代のアルバムの内容〉

富本の遺品写真のうち留学時代のものは、2冊のアルバムに収められた188枚の写真とアルバムから剥がれたと思われる3点の写真が存在する。アルバムはA4サイズ程度の紙製の市販品と思われる品〈写真1〉で、それぞれ約50ページで構成される。1ページに1枚から、多いもので6枚もの写真が貼られており、それぞれの写真はサイズが5センチ程度の小さなものが多い。各ページのあちこちに、〈写真2〉のような富本自筆のお洒落なカットが見られ、時折写真を撮影したと思われる場所の名前がレタリング調の文字で記されている。

1冊目のページの巻頭には「け とみもと（憲吉富本）」と「四月春」〈写真3〉という文字が記され、同様に2冊目には「けとみもと（憲吉富本）」「あき九月」「その二」〈写真4〉とある。「四月春」とは、富本がイギリスに到着した1909（明治42）年の4月、「あき九月」は同年9月を指す。

2冊のアルバムを「アルバム①」「アルバム②」として、ページを辿りながら写真の内容を検証してみる。

〈写真5〉富本と南薫造、〈写真6〉大沢三之助

「アルバム①」の最初の見開きページには、左ページに庭のデッキチェアでくつろぐ和服姿の富本の写真があり、右ページ上に富本と南薫造〈写真5〉、その下に大沢三之助〈写真6〉の写真が貼られている。

南薫造（1883-1950）は富本より3歳年上の東京美術学校西洋画科出身の洋画家で、図案科出身の富本とは、年齢も学科も異なるが、美校のマンドリンクラブで知り合い、当時の富本にとり最も親しい友人の一人であった。留学を志した富本が、留学先をフランスではなくイギリスにしたのも、先に留学した南がイギリスにいたのがその理由である。アルバムの中には、彼ら二人を写した写真がほかに2点、南単独の写真が2点残されている。

一方の大沢三之助（1867-1945）は、富本が美校に入学したときの図案科の教授である。大沢は1907（明治40）年1月から文部省の派遣で留学しており、「私の履歴書」によると富本が到着した時期には「文部省留学生のうちの大沢三之助工博が私たちの指導者のような人」であったという。富本は大沢から勧められ、「私は下宿に落ち着くと早々、サウス・ケンジントンのアルバート・アンド・ビクトリア・ミュージアムへ足を運んだ」ようで、その後富本がインド行の随行員として選ばれたのも、大沢が新家博士に推薦したためであった。大沢の助言や導きは、その後の富本の活動にとり、非常に意義深いものとなったといえるだろう。

なお、左ページにある和服姿の富本の写真は退色が激しいため、本稿では紹介しない

が、アルバムにはこのほかにも和服を着た富本の写真がいくつか存在する。富本とカスカートロード26番地で同宿であった佐藤功一が「トミーは變つた事が好きだつたと見えて巴里の市街を羽織袴で歩いたそうだ」²³と回想したように、富本は滞在中に時折好んで和服を着ていたようだ。

〈写真7〉 ロンドン郊外の風景写真

富本、南、大沢の写真のあとには、ロンドン郊外と思われる風景写真が続く。その合間に、さまざまな場所で撮影された富本や南、大沢の写真があちこちに登場する。〈写真7〉は、1909（明治42）年4月初め南薫造とともに滞在したウィンザーなどの風景写真と考えられる。

〈写真8〉 大沢三之助

ロンドン郊外を撮影した風景写真の合間に、富本のポートレートや友人たちを写した写真が再び登場する。〈写真8-1〉は建物に対して、中央の人物が極めて小さいが、引き伸ばしてよく見ると、写っているのは大沢三之助〈写真8-2〉である。興味深いことに、本写真の建物と同じ場所で撮影した写真が、『洋画家南薫造 交友関係の研究』²⁴に収録されている。そこには同じ建物の階段前で撮った2枚の写真が掲載されており、1枚に大沢三之助、南薫造、白瀧幾之助が、もう一枚には南、白瀧、高村光太郎が写っている。

南、白瀧、高村の3名は、それぞれ時期は異なるものの、ロンドンではオンスロースティユディオと呼ばれた下宿で暮らしていた。富本がロンドンで最初に滞在したのも、南の下宿先であったと考えられるので、この建物がオンスロースティユディオであった可能性がある。

〈写真9〉 鏡に向かって撮影する富本

鏡に向かってシャッターを押して、自分自身を撮影した珍しい写真。場所の特定は出来ないが、富本が所有したと思われるカメラが写っており、興味深い一枚である。

〈写真10, 11〉 カスカートロード26番地での富本と友人たち

「アルバム①」の風景写真の合間に貼られた友人たちのとのスナップ写真。背景の特徴的な壁紙から推測すると、これらの写真の撮影場所は「アルバム②」でも登場するカスカートロード26番地にあった富本の下宿先と思われる。

〈写真10〉は右側が富本で、手前左側で椅子に腰かけるのは、富本と同じ下宿に住んでいた佐藤功一（1878-1941）であろう。佐藤功一は早稲田大学からの派遣で留学した建築家で、帰国後に早稲田に建築科を創設した人物。富本の「私の履歴書」にも同じ下宿に住んだ人物として名前が記されており、美校で建築装飾を学んだ富本とは気の合う友人同士であったようだ。1922（大正11）年2月、『中央美術』に発表された佐藤による「富本君

のポートレー」には、「嘗て、倫敦の西ケンシントンのシェファード婦人の家に同宿の折、自分が旅行から帰て勞れ切つて、晝間モーニングルームで安樂椅子で居眠つて居たのを、富本君が竊に寫眞にとつた事がある。今でも其寫眞をアルバムに貼て置いて、安堵村を訪ふ私の知人に示して喜んで居るといふ事を聞いた」という記述があるので、これが佐藤のいう「安樂椅子で居眠り」したときの寫眞なのかもしれない。

一方の〈寫眞11〉は、同じときに撮影したと思われる佐藤と大沢三之助の寫眞である。建築家であつた大沢や佐藤は、室内裝飾や建築に興味があつた當時の富本にとり、頼れる先輩たちであつたに違いない。留学時代の富本は、画家などの美術關係の友人よりも、彼らのような建築關係の人々との交流のほうが頻繁であつたように思われる。こうした傾向はその後も続き、1914（大正3）年の結婚後に暮らした奈良県安堵村時代での寫眞にも、笹川慎一や西村伊作といった建築家との寫眞がいくつもあるのに対し、画家や陶芸家など美術關係者の寫眞それほど多くはなかつた。

〈寫眞12～14〉パリ旅行

〈寫眞12～14〉は「アルバム①」に収録された、ロンドンからパリへ旅した時に寫したと思われる寫眞で、ページの始まりに富本自筆の「巴里行」という文字がある。富本は1909（明治42）年末に、パリを経由してインドへと視察旅行に随行するが、それらの寫眞は「アルバム①②」には収められていないので、これはその時とは別のものと考えられる。なお、本アルバムは時系列を考慮して作成されたように見えるので、特定は出来ないものの、富本がパリへ出掛けたのは1909年5月から6月頃であつた可能性が高い。

収録された寫眞の大半は〈寫眞12〉と同じ風景寫眞で、〈寫眞13〉や〈寫眞14〉のような友人たちとのスナップは2～3枚にすぎない。〈寫眞13〉は富本と南薫造だが、富本と南の寫眞はアルバムのあちこちに出てくるので、これがパリで撮影されたものかどうかは不明である。

〈寫眞14〉はパリ在住の日本人画家を撮影したと思われる寫眞。富本がパリへ旅したと考えられる1909（明治42）年5月から6月頃には、何人もの日本人画家がパリに滞在しており、彼らの多くは東京美術学校の卒業生や關係者であつた。寫眞左から2番目は大沢三之助と思われ、富本は恩師であつた大沢とともにパリへ旅し、彼らの寫眞を撮影する機会を得たと想像される。

また、右から2番目の人物は、この頃にアメリカからパリへと移つた洋画家・柳敬助（1881-1923）である。柳敬助は1909年4月頃パリに到着しており²⁵、富本は柳敬助とはパリで初めて出会つたと述べているので²⁶、それがこの時の寫眞なのかもしれない。富本と柳は帰国後も親しく交際し、お互いの家を行き来するほどの間柄であつた。大正期に寫された富本の安堵村時代のアルバムにも、柳の寫眞が存在しており、1923（大正12）年に柳が没するまで彼らの交際は続いた。

一方、その他の人物ははっきりとはわからないが、それぞれの顔の特徴から見ると、当

時パりに滞在した湯浅一郎（左）、大沢三之助、和田三造（中央）、柳敬助、有島壬生馬（右）と推察される。とはいえ、富本が記した回想録や書簡の中には、湯浅、和田、有島といった日本人画家の名前は見られないので、詳細は不明である。

〈写真15～17〉 ハンティンドン

「アルバム①」で「巴里行」の次に富本が地名を記したのが、〈写真15〉の「HANTINGDON（ハンティンドン）」である。富本がなぜこの地を訪ねたのかは不明だが、ここを気に入ったようで、イギリス滞在中に2度訪ねており、これは1回目の訪問時の写真である。〈写真16〉は滞在した家の前と思われ、この場所で撮影した写真が複数枚存在する。また〈写真17〉に写る右の女性は、富本のアルバムのあちこちに登場する人物である。富本はカスカートロード26番地に滞在したとき、家主の女主人からたいそう気に入られ、自分の姪と富本を結婚させたがっていると言われている²⁷。〈写真17〉の女性がその人物なのであろうか。

〈写真18〉 イルフラコム

「アルバム②」は〈写真4〉のページで始まり、次ページの下に「ILFRACOMBE」〈写真18〉と記されたイルフラコムで撮影した写真が続く。イルフラコムはイギリス南西部、デボン州のリゾート地である。ここへは一人で旅したようで、他の日本人が写る写真などはないものの、約20枚の写真が存在する。

〈写真19～27〉 カスカートロード26番地

〈写真19〉の左ページはイルフラコムで最後に写した写真である。そして次ページ下には富本の字で「二六 かすかと街」〈写真19-2〉と記されていて、このあとは下宿先のカスカートロード26番地と思われる写真が続く。

〈写真20～22〉は下宿先の日本人を写したと思われる写真。

〈写真20〉の右側に写るのは、国文学者で図書館学者であった和田万吉（1869-1934）である²⁸。〈写真21〉も右手前に和田の写真が写るので、このときに撮影したと想像され、周囲に写るのは下宿先の日本人たちであろう。人物たちの詳細は和田を除いて不明だが、日本人画家など美術関係者で特定出来る人物はいない。富本は「私の履歴書」のなかで「同宿にはエンジニアで電気学者の鳥潟右一氏、早稲田の建築科の創始者佐藤功一氏、日本で初めて自転車らしい自転車の製造を手掛けた人で蔵前高等工業の教授をした根岸政一氏というような人がいた」と記しているので、この写真に写るのが富本のいう同宿の人々であったのかもしれない。

〈写真22〉は、〈写真21〉の次に貼られた写真。手前に座るのは大沢三之助で、奥の中央に和服姿の富本が立つ。他の人物は不明だが、〈写真21〉に写る人々と同じ人物はいないように見える。

〈写真23～25〉 椅子

〈写真23～25〉は富本の興味の対象を示す椅子を撮影した珍しい写真。

〈写真23〉は帰国後に富本が『美術新報』で発表した「椅子の話（上）」²⁹で、挿図として掲載した「桎梏のデスク用椅子」を正面から写した写真である。これが貼られた同じページの横には、写真をはがした跡があるので、『美術新報』に掲載した写真がここに貼ってあったと考えられる。この椅子はロンドンの下宿で富本が好きで使っていたものだという。

もう一方の〈写真24、25〉も同じように撮影されたもので、当時の富本の興味の対象が見て取れる写真である。

〈写真26、27〉 富本と友人たち

カスカートロード26番地で写したと思われる富本と友人たちとの写真である。〈写真26〉は、左から富本、ひとりおいて白瀧幾之助（1873-1960）、柳敬助が写る。白瀧はロンドンで富本と最も親しく交際した友人の一人であるが、「アルバム①」には白瀧の写真はなく、「アルバム②」のここで初めて登場する。

白瀧幾之助と富本は、南薫造に紹介されてロンドンで初めて知り合った。南がウィンザーへ滞在したときには、白瀧が富本を伴ってここを訪ねるなど、3人で親しく交流したようだ。その後、1909（明治42）年7月7日に南が大沢三之助とともにパリへ移住すると³⁰、白瀧はロンドンでの富本にとり最も身近で信頼できる友となった。富本はハンティンドンへ旅したときなど、白瀧に宛て頻繁に絵はがきを送っている³¹。帰国後も彼らの交際は続き、1914（大正3）年に富本が結婚した際には、白瀧は仲人を務めた。

柳敬助と富本はパリで出会ったのが最初であると先述した。柳は1909年8月にロンドン経由で帰国したので、この写真はその頃に撮影されたものと想像される。

〈写真27〉も同じときに写したような写真で、右側に大沢三之助が写っていて、富本がいないので撮影者は富本と考えられる。

2枚の写真に写る不明人物を調査したが、特定には至らなかった。南とともに1908（明治42）年頃オンスロースティユディオに住んでいた高村光太郎の面影もあるが、高村は富本がロンドンに到着したときにはパリへ移っているため、おそらく別の人物であろう。

〈写真28、29〉 2回目のハンティンドンへの旅

〈写真28〉以降のページには、再びハンティンドンへの旅の写真が13枚続く。最初のページの下には「拾月五日 第二半鎮敦」〈写真28-2〉とあり、これは「（1909年）拾月五日 第二（二回目の）半鎮敦（ハンティンドン）」を指す。この旅の間、富本は白瀧に宛て毎日絵はがきを送っているため、現存するそれらにより当時の様子が推測できる。

富本が白瀧に宛てた同年10月9日付の絵はがき³²には、〈写真29〉と全く同じ構図の絵が見られるので、これはハンティンドンからセントアイヴス³³へ旅したときに写した写真

であろう。

〈写真30、31〉再び、カスカートロード26番地

ハンティンドンへの旅の後には、再びカスカートロード26番地での写真が続く。ここでも最初のページ〈写真30-1〉の下部に、「二六 カスカト」〈写真30-2〉と書かれていて、左ページに写るのは下宿の女主人シェファードであろう。

〈写真31〉は、過去の富本関連の図録や書籍などでしばしば用いられた写真で、富本と白瀧幾之助は判明するが、左側の人物は不明である。この人物は〈写真30-1〉の右ページにも写り、他のカスカートロード26番地での写真にもよく登場するので、富本とはかなり親しかったと思われるが、人物の特定は出来なかった。

〈おわりに〉

以上が富本のイギリス留学時代と留学アルバムの概要である。

留学以前の富本は、美校図案科の卒業を目前に控え、ステンドグラスや室内装飾を学ぶために留学したものの、絵画や彫刻、ましてや陶芸などにそれほど興味は抱いていなかった。実際の留学期間中も、短期間ステンドグラスの学校に通ったものの、絵画や工芸の分野で特定の師について学んではいない。富本が留学中にしたことは、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館でのスケッチや、ハンティンドンなど各所での写生、イスラムの国々を巡ってさまざまな工芸品に触れたことなどであった。

しかし白瀧幾之助が、富本から送付されたハンティンドンでの絵はがきの絵を見て、「毎日絵葉書を贈ッて呉れた。馬鹿ニ旨くなりやがッた（中略）大分水彩の傑作を拵へて来たらしい、やツノイー色を出すニはほとほと感心して仕舞ふ、確ニ天才ダと思ふよ」³⁴。と記すほど、富本の非凡な才能はこの頃に開花した。そして、留学中に訪ねた美術館、博物館で見た日本の美術や工芸品に対して大いに興味を抱いて帰国するのである。

その後帰国した富本は、水彩画、創作版画、革工芸や染織といった留学時代に興味を抱いた工芸品を、次々と制作し発表した。そして、徐々に陶芸の世界に没頭し、陶芸家として独学で創作活動を始めていく。富本憲吉にとって留学時代とは、将来への転機となった出来事であり、彼の創作活動の原点であったといえるだろう。

本稿は2012年度鹿島美術財団の助成による研究成果の一部である。

(註)

- 1 『モダンデザインの先駆者 富本憲吉展』朝日新聞社、2000年（そごう美術館ほかで開催）。『富本憲吉と瀬戸』瀬戸市歴史民俗資料館、2001年、『人間国宝の日常のうつわ ―もうひとつの富本憲吉』東京国立近代美術館工芸館、2004年。『生誕120年 富本憲吉展』朝日新聞社、2006年（京都国立近代美術館ほかで開催）。『富本憲吉のデザイン空間』松下電工汐留ミュージアム、2006年。『富本憲吉と西村伊作の文化生活』ル・ヴァン美術館、2008年。『富本憲吉と一枝 ―暮らしに役立つ美しいもの―』富山市陶芸館、2011年、などがある。
- 2 富本憲吉「私の履歴書」『私の履歴書 文化人6』日本経済新聞社編集発行、1983年12月、pp. 198-205。
- 3 奈良県立美術館編『南薫造宛富本憲吉書簡（大和美術史料 第三集）』奈良県立美術館、1999年。
- 4 辻本勇、海藤隆吉共編『富本憲吉の絵手紙』二玄社、2007年。このほかに、岡本隆寛、高木茂登『南薫造日記・関連書簡の研究』（1988年11月）や、高木茂登「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について 白瀧幾之助の南薫造宛書簡」『広島県立美術館研究紀要』第1号（1994年）などがある。
- 5 辻本勇『近代の陶工・富本憲吉』ふたばらいふ新書、1999年。杉瀬公美「富本憲吉が訪れたセントアイヴスとは」「ロンドンでの富本憲吉の足跡を訪ねて」『富本憲吉研究会会誌 あざみ』創刊号、1992年10月、pp3-17。
- 6 拙稿「富本憲吉再考 ―未公開写真を中心として―」『鹿島美術研究』年報第30号別冊、2013年11月、pp70-81。
- 7 富本がカメラを初めて手に入れた時期など、その詳細は不明である。明治末期のカメラは相当高額の品であったことが想像されるが、奈良県安堵村の富本の生家は江戸時代から続く旧家であり、富本はイギリスへ私費留学出来るほどの恵まれた環境にあった。おそらく留学にあたり、これを購入したと想像される。
- 8 前掲書『近代の陶工・富本憲吉』。本書の末尾には、同記念館副館長であった山本茂雄氏による詳細な年譜が記されている。山本氏は記念館の開館当初から、訪問された富本の友人や知人、そのご遺族など多くの関係者にお会いして、さまざまな話を伺い、それらを記録して、本年譜を作成された。
- 9 山本茂雄、森谷美保、松原龍一編「富本憲吉年譜」前掲『生誕120年記念 富本憲吉展』p.270。
- 10 藤崎綾「資料紹介：南薫造『1909年日記』と『滞欧期ノート』」『広島県立美術館紀要』第13号、2010年。南八枝子『洋画家 南薫造 交友関係の研究』杉並けやき出版、2011年。
- 11 前掲註3。
- 12～14 前掲註4。
- 15 前掲註10。
- 16 山本茂雄「1910年の富本憲吉」未刊行、1989年10月22日。山本氏は本稿のなかで、富本が水木要太郎へ宛てた絵はがき、書簡を精査し、富本のイギリス滞在時の住居や動向を記している。
- 17 前掲註5。
- 18 富本の日本出発日は、山本巖氏が当時の新聞などから平野丸の出航記録を入念に調査された。山本茂雄氏のご教示による。
- 19 富本憲吉書簡水木要太郎宛（1909年2月23日付）に「都合により下記へ K. Tomy 7. Bruce Grover Tottenham London」とある。

- 20 富本憲吉書簡水木要太郎宛（1909年6月7日付）に「学校の都合にて下記へ転居仕り候 Ken. Tomimoto 5. Fernshow Rd London. S.W」とある。
- 21 前掲註2、p.199。
- 22 富本憲吉「工藝品に関する私記より（上）」『美術新報』第11巻第6号、1912年4月、pp.8-14。なお、留学時代のスケッチは現在京都国立近代美術館に所蔵されている。
- 23 佐藤碧座「富本君のポートレー」『中央美術』第8巻第2号、1922年2月 p.97。佐藤碧座とは佐藤功一の号。
- 24 前掲註10、『洋画家南薫造 交友関係の研究』 p.59。
- 25 「柳敬助年譜」『柳敬助集』 礪山美術館発行、1983年。 p.75。
- 26 前掲註25p.84。富本は柳の没後、柳の妻に宛てた書簡の中で「初めてパリで会った事、荒れる海峡を渡った事」と記している。
- 27 前掲「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について 白瀧幾之助の南薫造宛書簡」や佐藤碧座「富本君のポートレー」『中央美術』などにこのことが記されている。
- 28 富本は1909（明治42）年9月22日付で中学時代の恩師水木要太郎に宛てた絵はがきのなかに、「和田先生に面会仕り候」「和田先生および小生の宿所に御座候」（『富本憲吉の絵手紙』 p.145）と記している。
- 29 富本憲吉「椅子の話（上）」『美術新報』第11巻第11号、1912年9月、pp.11-16。写真は「椅子の話（上）」に掲載され、解説は『美術新報』次号の「下」に記されている。
- 30 前掲註10「資料紹介：南薫造『1909年日記』と『滞欧期ノート』」 p.27。
- 31 前掲書『富本憲吉の絵手紙』。
- 32 前掲註4『富本憲吉の絵手紙』 p.79。
- 33 前掲註5の「富本憲吉が訪れたセントアイヴスとは」によると、富本が訪ねたセントアイヴスは、バーナード・リーチが開窯した地ではなく、ケンブリッジシャー州のセントアイヴスである。
- 34 白瀧幾之助書簡南薫造宛、1909年10月11日付（「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について 白瀧幾之助の南薫造宛書簡」 p.8

本稿の執筆にあたり、富本憲吉の孫であり著作権者の海藤隆吉氏、富本憲吉資料館館長の山本茂雄氏に多くのご教示をいただきました。記して謝意を表します。

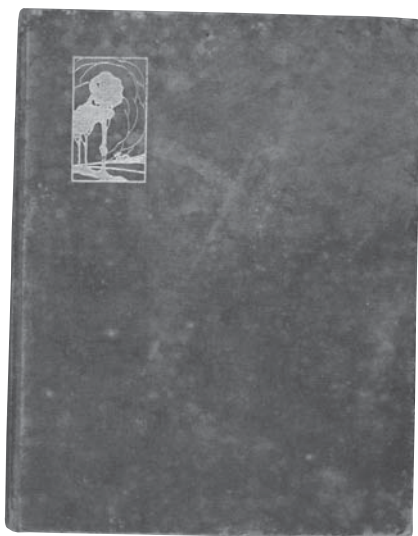


写真1 留学時代アルバムの表紙

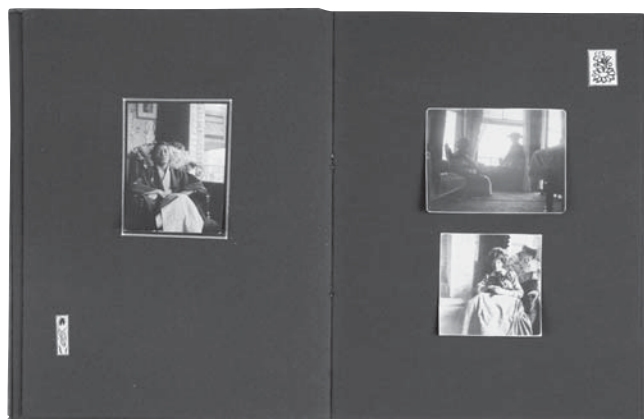


写真2 装飾されたアルバム内のページ

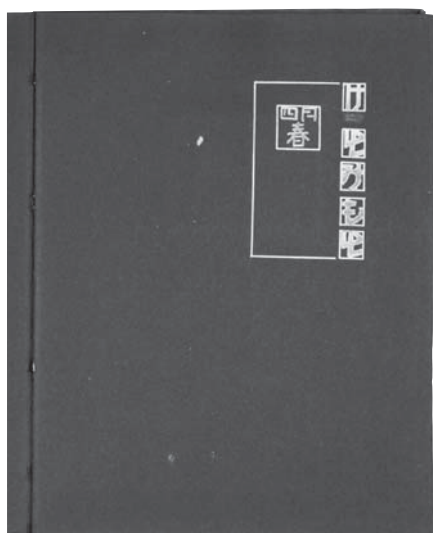


写真3 アルバム①

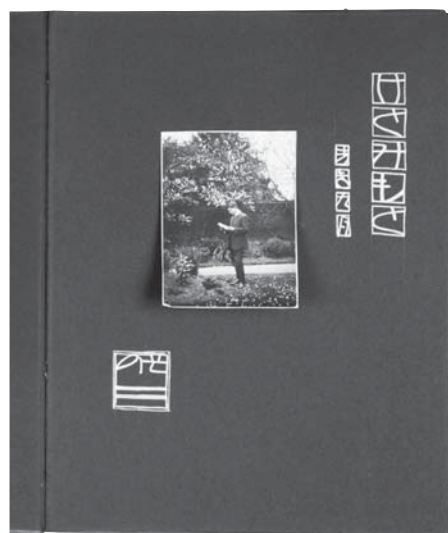


写真4 アルバム②



写真5 右：富本、左：南薫造



写真6 大沢三之助

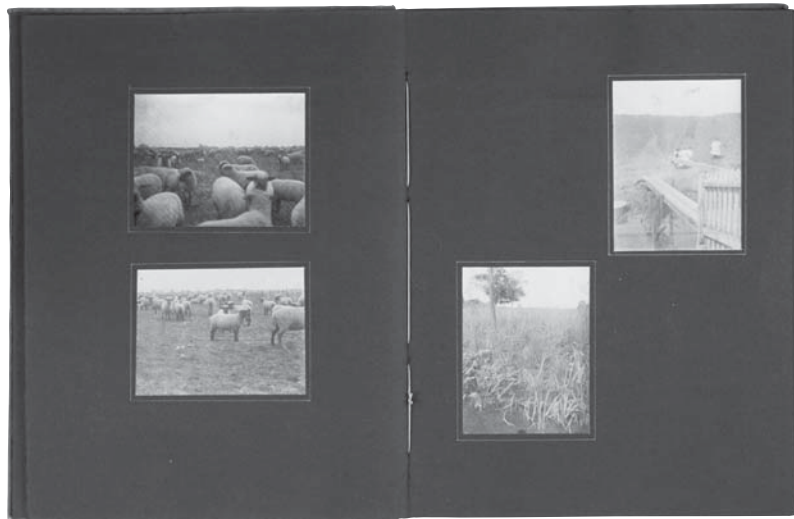


写真7 ロンドン郊外の風景写真



写真8-1 大沢三之助



写真8-2 大沢三之助



写真9 鏡に向かって撮影する富本



写真10 右：富本憲吉、左：佐藤功一



写真11 右：佐藤功一、左：大沢三之助

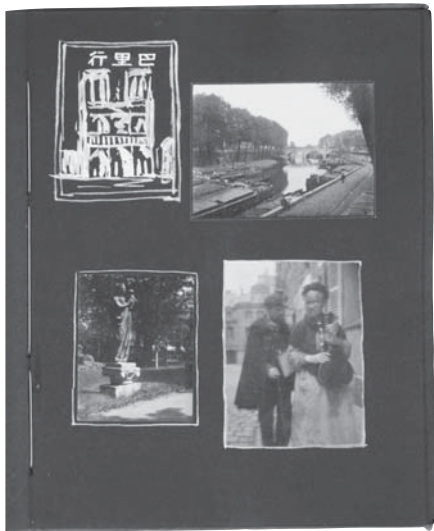


写真12 パリ滞在中の写真



写真13 左：富本、右：南薫造



写真14 パリに住む日本人画家たち

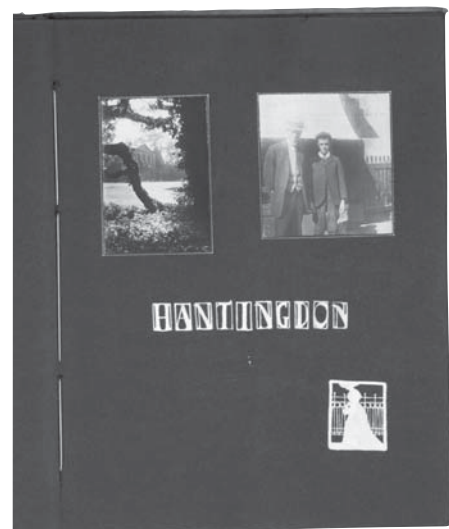


写真15 ハンティンドン



写真16 ハンティンドンでの富本



写真17 ハンティンドンでの富本と女性



写真18 イルフラコムでの写真



写真19-1 カスカートロード26番地での写真



写真19-2 「二六
かすかと街」



写真20 左：富本、右：和田万吉



写真21 カスカートロード26番地での日本人たち



写真22 中央奥：富本、手前：大
沢三之助



写真23 椅子1



写真24 椅子2



写真25 椅子2



写真26 左から富本、ひとりおいて白瀧幾之助、柳敬助



写真27 左から柳敬助、白瀧幾之助、ひとりおいて大沢三之助

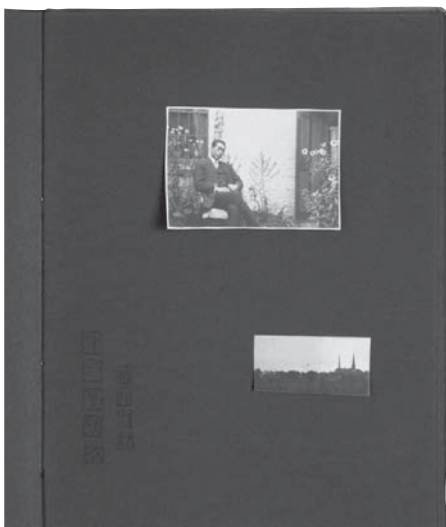


写真28-1 ハンティンドンでの写真

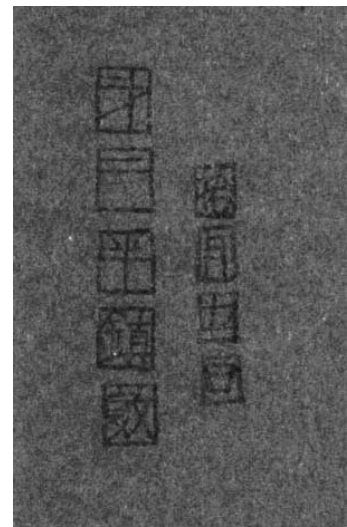


写真28-2



写真29 セントアイヴス

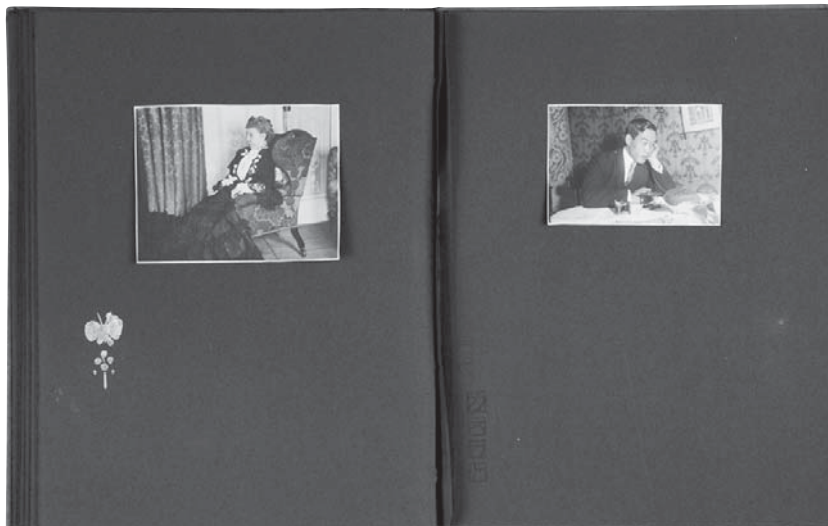


写真30-1

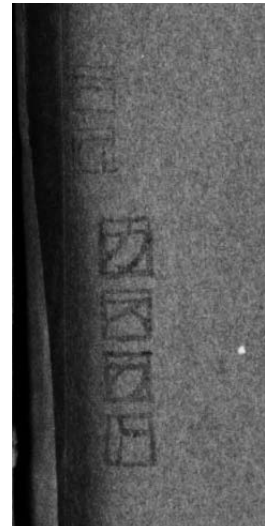


写真30-2



写真31 右から富本、白瀧幾之助